

論文概要

東京医療保健大学

医療情報学科

HI012007

植木 莉香

鎮痛剤服用患者における COX2 インヒビターの有用性に関する疫学研究

薬は患者にとって不快な症状を改善する一方で、その副作用によって体に負担をかけてしまう場合がある。身体の調子を改善するために薬を服用したにも関わらず、副作用によって問題の無い部分に悪影響を与えてしまえば、患者は身体的にも精神的にも苦痛を感じることになる。副作用の少ない薬は患者も医療者も望んでいるものである。

私たちにとって、身近な薬の一つである鎮痛剤は、痛みを発生させている物質、プロスタグランジンの生成を抑制することにより鎮痛効果を発揮している。しかしながら、このプロスタグランジンには痛みを発生させる働き他に胃の粘膜保護を担う働きもある。すなわち、鎮痛剤は、鎮痛作用を發揮すると同時に胃に負担をかけてしまうのである。そのため、鎮痛剤を服用する際には、食後に服用することや胃薬と共に服用することなどが推奨されている。近年、胃を荒らすことなく鎮痛作用を發揮する鎮痛剤、COX-2 インヒビターが新たに開発され、それを使用した患者の診療データが集められている。本研究では、こうした診療データを用いて、COX-2 インヒビターは胃を荒らしやすい NSAIDS 比べて副作用が少ないのかどうかを検討していく。

本研究の対象データは、山梨県笛吹市の二次医療機関から集められた 1864 件の臨床データであった。調査項目は年齢や性別、投与された鎮痛剤の種類、投与期間、併用した胃薬などと約 20 項目以上が設けられていた。過去にさかのぼったコホート研究によりデータが集められているため、交絡バイアスの影響を受けることになる。その影響を考慮するために多変量ロジスティック回帰分析を実施した。

結果から、COX-2 インヒビターの使用により副作用の発生が軽減されることが読み取れたが、検定を行った結果 p 値が 0.8 であったため副作用発生の軽減についての判断は保留という結論に至った。本研究に使用した COX-2 インヒビターのデータ数は非常に少ないため、分析結果の信頼性が高いとは言い難く、より精度の高い結果を求めるとは更に多くのデータで分析を行い検討する必要がある。

〈目次〉

はじめに	P1
第二章 研究の背景	
2.1 痛みの発生する仕組みについて	P2
2.2 鎮痛剤の作用機序	P2
2.3 鎮痛剤の副作用について	P2
2.4 胃薬との併用	P3
2.5 cox-2 インヒビターについて	P4
第三章 研究の方法	
3.1 研究の目的	P5
3.2 使用するデータについて	P5
3.3 分析方法について	P5
3.4 交絡について	P5
第四章 研究の結果	
4.1 分析の準備	P6
4.1.1 「NSAIDS 分類」の作成	P6
4.1.2 「分析用併用胃薬」の作成	P6
4.1.3 「副作用の有無」の作成	P7
4.2 各項目の分布	P8
4.3 各項目と鎮痛剤の関連性	P9

4.4	各項目における副作用の分布	P10
4.5	各項目が副作用発生に与える影響	P11
4.6	交絡バイアス	P12
4.7	多変量ロジスティック回帰分析の結果	P13
第五章 考察		
5.1	多変量ロジスティック回帰分析からわかること	P14
5.1.1	胃薬の効果について	P14
5.1.2	COX-2 選択的阻害薬について	P14
5.2	既存の鎮痛薬と COX-2 インヒビターを比較	P14
第六章 まとめ		
	〈謝辞〉	P15